

正宗白鳥

今年の秋



今年の秋

十月は好季節であるが、毎年雨が多い。旅行しても、家においても、日を暮し心地のいいのは十一月頃からである。今年の秋、私はいかにして過そうか。昭和三十三年十一月一日。私は歌舞伎座で挙行される芸術祭に列席するつもりで家を出て、その次手に、放送局に立寄ることにした。予約していた簡単な放送の録音を採って、お茶を飲んでいると、お宅から電話がかかったとの知らせがあった。世間の用事の乏しい私には外出先きへ自宅から

電話のかかる事なんか滅多めったにないので、珍しい事と思いつながら、受話器を手にして耳を注ぐと、「郷里くにのAさんの病気が急に悪くなったという知らせが、姫路のSさんから築土のIさんに来たそうです。それで、Iさんは今日の夜行でお郷里へ立つと、今電話で知らせて来ました。あなたもIさんと一しよにいらっしやったらいいでしょう」と云うのであった。

「そうだなあ」私は、今日という今日、直ぐ帰郷の途に就いてもいいが、二日の日曜、三日の祭日と二日つづきの休日を控えた今夜、寝台は容易に得られないだろうと

思案した。そして、築土とも打合せて、どの夜行列車であれ、寝台を獲得する努力をすることにした。晩まで芸術祭を観て、それから一度自宅へ帰って旅仕度をして、夜行車に乗ることにした。歌舞伎座の座席を先きに取り置いて置いて、寝台券を買いに廻った。こういう忙しい思いをしている間に、私は、たびたびAの顔を眼前に思い浮べた。さまざまな都会の男女を前後左右に見ていながら、それ等は雑然たる人間の影であって、百里を隔てた郷里に病臥して、死に瀕ひんしている筈のAだけが、巖然たる人間存在として鮮明に、わが眼前に現われているのである。

Aは、私の弟である。私が一家の長男で、Aは次男である。年齢に於て二歳の差があるだけである。人間として一しよに育って来たようなものだ。私の両親は十人もの子供を産んだので、その十人のうち八人は、今なお生存しているのであるが、幼い時分に一しよに親しく成長したために、Aの肉体も精神行動をも最もよく知っているようである。私は早くから故郷を出たのだし、弟妹と往来することも、懇談することも、甚だ稀れであり、私に取っては、他人が他人である如く、兄弟も他人とさしたる相違がないように思われていたのであるが、ただ、

Aとは、二歳だけの相違であるため一しよに育ち、小学校卒業時分まで、寝食を共にしていたので、おのずからAという人間をよく知っているように思う。つまり人類のうちで、私が最もよく知っている人間はAであると云っているようだ。女性としては、無論、私は一人の妻だけによって人間女性を知っている筈であり、社会に伍して、いろいろな人間相を断片的に見てはいるものの、純粹の人間をそのままに見たのは、Aに依ってであるように感ぜられた。私は自分の姿を彼に於て見ることがある。それはいやであり、好ましからざる事であるに関わらず、

そうだからそうである。

老境を突破するまでに生き延びた八人の兄弟のうち、誰が最初に死ぬるかとかねて思っていたが、おれでなくってAであったか。Aは白内障に罹^かって手術をしたが、その後は殆んど書物を読むに堪えないほどに視力が衰えていたそうである。胃腸も悪く、長い間普通食も食べられぬようになっていたらしい。それでも、一時間もバスに乗って岡山の学校へ国学を教えに行くこと数年に及んだと云われている。

年齢^{とし}が年齢であるし、今度は回復の見込みはあるまい

と、私は独断した。そう独断すると、生存中に会いたいような気持になりだした。それで、歌舞伎座の入場券を拋棄して、人頼みしてようやく手に入った寝台券を持って、急いで家へ帰った。旅の仕度は調っていた。

父の葬式、母の葬式。私の妻も、この二つの葬式には立合っているので、田舎の葬式振りは略々知っていた。

「田舎では近所の人が、今でも昔からの慣例通りに葬式の世話をして呉れるだろうからいい」と、私は呟いたが、それは、私達が、今にも死ぬかもしれないのに、葬式の始末をして呉れる者のないのを、氣遣っていること

に連関しての眩きであつた。

私の故郷に親しみのない妻の望みで、多磨の墓地の片隅に、自家用のささやかな埋葬地を買つたのであるが、この世のいのちの絶えた残骸を、そこに埋めるまでの手続きの煩^{わずら}わしさを、私達は不断気にしていたのであつた。その煩わしさの一切を引受けて呉れる者があればいいだろうが、私達の身边にはそういう調法な人は一人もいないのである。葬儀会社にすべてを任せたらどうだろうかと思つているものの、今の時世にでも、葬儀会社だけでは万事解決されそうではない。殊に私自身は、死ん

で葬式を出される時に、遺族（そういう者が私にもあり
として）が戸まどいするような事がありはしないか、真
剣に氣遣われているのであるが、それは、私が柄がらになく
勲章を貰っている事である。手軽に、誰にも知らせずに、
こっそり焼き場へ持って行って、骨だけ拾かみったらそれで
おしまいと云う訳には行かなくって、お上に届けて告別
式をも催して、文部省か宮内省から、お役人が来て弔辞
を述べるのが規定になっているらしい。それに関しての
儀礼を果す人間は私の家にはいないのである。虚礼にし
ても礼を守らねばならぬのだらうと、取り越し苦勞の私

は、おりおりそれを気にして、いつそ適当な時期に、勲章をも、或は芸術院会員をも、自分には、空恐ろしいほどの過分の待遇として辞退したらいいのではないかと、考えたりしていた。人造の飾りを取って、古い朽ちた見すぼらしい一塊の生物として死んで行くのが、自分の身にふさわしいのではないかと、よく思っている。私の死後^よ抛^どん所^{ころ}なく私の葬式をやらされる誰かが、煩わしい思いをさされなくて済む訳である。

ところで、先頃芸術院の総会に出席すると、或美術家が会員たる栄位を辞退したいと申出ているが、それを許

可すべきか否かが総会の議題の一つとなっていた。美術家にはおりおりこんな事を云い出す癖があるらしい。「止めたい人は止めさせたらいいのではないか」と、私はいつも手軽に思っていたが、世間の秩序を守るためには、そう簡単には取極められないものらしい。或程度の引留め策が講ぜられた揚句、それでは「甚だ残念ではあるが」と、勿体^{もつたい}をつけて、辞任許可となるのを例とするのである。「はじめから会員にならなければいいではないか」と云った人もあった。その通りである。「会員になる時に、途中で辞任しませんという証文を一札入れさせるこ

とにしたらいかが」と云った人もあった。「途中で辞退して、自分は芸術院会員以上の人間になったつもりなんだ。いつまでもあんな会員になってるのは馬鹿だというようなものだ」と、隣席の人と私語していた人もあった。まさかそれ程でもあるまい。はじめはこの名誉ある肩書を有難がって拝受しても、何か身辺の事情、心境の変化があつて、辞退したくなることもあるのではないか。辞任の自由はあつて然るべきだと、私はかねて思っていた。死ぬ時、葬式の時、面倒だから、この荣誉ある装飾から脱却して置こうかと、私は詰つまらない空想をしているので

ある。

「Aが死んだら、故郷の家とおれとの関係もちがうことになるのだから、処分法を考えねばなるまい」などと、Aの死は極まっていることとして、彼死後の何かの話を妻と取りかわして、私は、殆んど何も入っていない鞆を提げて家を出た。今夜、私と一しよに出立する筈の、弟のIは、私よりも三時間後の夜汽車の寝台を辛うじて手に入れたそうであるが、こういう旅行は一人一人の方がいいのではあるまいか。私の寝室は鹿児島行特急のコンパートメントで、しかも、二人部屋に誰も乗って来ないで、

私独りで一室を占領していたのである。このまま鹿児島まで行ったらいいのにと思ったりして、眠りづらい一夜を過した。

交通機関はますます進歩発達して、昨年、郷里の一端にまで汽車が通うことになった。バスも縦横に走っている。私の幼少時代には、汽車までの距離が三里もあり、その間をヨタヨタの人力車が動いているだけであつた。そんな有り振れたことを今度事々しく思出したのは、学生時代、私の暑中休暇後の上京の時に、Aが私の荷物を持って駅まで送って来たことである。駅に預けっ放しに

して置いた私の行李などを、Aが炎天下の三里の道を往復して、持ち帰って来たことなどであった。その時ラムネを一本飲んで来たと言ったことを覚えている。春は物資が乏しかったので、私が重い病気に罹って、くだものを欲しがった時に、二里を隔てた村に梨を買いに行かされたのはAであった。

私は夜明け前に岡山に着いて、そこから引返して、最近開通した汽車に乗り、バスに乗り移って、郷里の停留所で下りると、愛嬌のある若い女性が、「荷物をお持ちしましょう」と云って私の軽い鞆を持とうとした。この

村の女らしくはないのに、どうしたことかと訊くと、「A先生のお見舞に来ました」というのである。Aの教えている岡山の女学校の生徒であるらしい。私は一しよに歩いて、自分の家の前で別れて、その女性は、A夫婦の住所となつている山の家の方へ行つた。私の家は、上べは管理人見たいになつてAの一人息子H夫婦が住んでいゝる。私は侵入者見たいに、古ぼけたその家の土間を通り抜けて畳の上に乗つて、一目見渡すと、常例の如く、自分の幼少の頃の生活が、今も昔有つた如くに再現するのであつた。Hはいつものようににこにこした屈托くつたくのなさ

そんな顔している。奥の座敷に入って見ると、近年結婚して他郷へ行っている筈の、Hの娘二人が朗らかな顔して座を構えている。それぞれに赤ん坊を一人ずつ連れて来ていて、蒲団の上に寝かしていた。これ等の赤ん坊は、Hの孫であり、Aの曾孫ひまごであるのかと、人生推移の様が不思議のようであった。一人は生後四十五日、一人は生後九十五日。このくらいの日数でこんなに大きくなるものかと、子供のない私は、珍奇な生物を見るようなつもりで、暫く見詰めていた。

Aの病状について、H夫妻に訊くと、

「幽門閉塞症とかいうんですが、癌が出来とるんじやそ
うです。糞便が腹一杯たまっていて、お医者の手で出し
て貰うんです。たべ物は何もたべられないんですが、そ
れでは生きていられないんで、山羊やぎの乳かくだ物の汁を
少しばかり飲んで居ります」と、云った。十月の十五日
までも、苦しいのを忍んで岡山の学校へ通っていて、ど
うにも動けなくなつてから、一週間ばかり病院に入つて
いたのだが、治療の当てがないので帰つて来たのである。
当人は癌に罹っていることを知らないのです、回復の望み
をまだいくらか持っているそうだ。「見舞品を持って来

た人の名はつけて置き、快気祝いをする時にいるだろうから」と云ったそうだ。

「見舞に来る人に一々容体を話すんだから、厄介で為し様ようがない。テープにでも取っとくといいんだが」と、Hは笑っていた。

私は、いつものように、この家に帰ると眠くなった。幼少の頃の私の勉強部屋であり、後には、父の常住の居間になっていた日当りのいい小ぢんまりした部屋が居心地がよくって、私は帰郷のたびに、そこで気ままに寝ころんで過すのを例としていたのだが、今度はそこでHが

見舞客に応対することになっていているらしいので、私は自分独りの居所がなくなった思いをした。見舞客なんかには会いたくないし、眠くもなったので、二人の赤ん坊の寝ている座敷へ入って、その側で毛布をかぶって眠った。赤ん坊の泣声が聞えても、それを、私は歌謡曲でも聞くような気持で耳にしながら、安らかに眠った。

目が醒めた時分に、昨夜の遅い夜行車に乗って来たI が到着した。赤穂留りの汽車で、乗換えまで一時間の余裕があったから、赤穂見物をしたと云って、名物の汐見しおみ饅頭まんじゅうを出して、これはうまいと、頻しきりに褒め立てた。

私も一つ抓つまんで賞味した。「Aにちよつと会って来ようか」と、私はIを促したが、生存中のAに会うのが、昨夜来の私の唯一の願望であつたのだ。面会謝絶になつていようとも、一目見て一言口を利くぐらいな事は差支えないだらうと思つていた。

山の家には、病室の側の部屋に、バスで私と一しよであつた女性が謹ましやかに坐つていた。何かの手助けをするつもりで、こういう女性がおりおり来訪しているのだそうだ。病室に入ると、Aの寝姿は冷静で、死の迫つているらしい趣きは見えなかつた。Aの妻女は夜具の裾

の方において、時々足でも揉んでいるらしかった。Aは視力もないであろうし、私達の方を見ようともしなかつた。「誰にも知らせんつもりじゃつたのに」と、低い声で云ったのが、短い話の唯一の要点見たいであつた。私も、何を云つていいか迷つて、つまりは何も云わないことにした。云わないための心残りはなかつた。

私とIは静かに病室を出ると、次手ついでに墓詣りをすることにした。墓地は直ぐ近くであつた。山に沿つた墓地からの四季の眺めは美しいのであるが、この日は、ことに秋のなかばの、晴れた日である。山も海も、おのずから

の絵であって、私達も画中の人物となるのである。両親の墓、祖母の墓、先祖代々の苔蒸こけむした墓を見廻りながら、私は、ふと、多磨の墓地の事を連想して、Iに向って話した。「死んだあとはどうでもいいので、骨を埋める所だけが必要だとして、多磨の隅っこの方を買ったのだが、おれも死ぬ時には、あんな淋しい所に埋められるよりも、両親や先祖の墓の側に葬られたいと云うようになるかも知れないね」

実は、死んだ後では埋骨地なんかどうでもいいのだが、生きている今、風趣豊かなこの墓地に永遠に眠る事を空

想することだけに一種の興味が感ぜられるのである。Aもそのうち此処の墓地の空いた所に埋められるのである。うが、私の遺骸の始末はどうなるか。

さつき接触したAは、意識は鮮明であったが、私などの訪問について何の関心も持っていないようであった。「わざわざ来てくれなくつてもよかった」と、衰えた頭に感じていたらしく、私の心に印象された。一しよに育った人間に一生の別れを告げる時には、何等かの感傷的気持に浸ることがありそうに私は想像していたが、それは詩人や小説家の凡庸な捏造事ねつぞうじではないかとさえ思

われた。病氣の見舞客が病状の経過などを、真面目な顔して、慎ましやかな態度で訊いているにしても、詰りは一種の興味からなのだ。自分に何の利害関係もなかったら、人の死は話題としても、気軽に興味中心で味われるに過ぎないのである。

しかし、自分の生みの子や、孫娘に見守られて死ぬのは、孤独の死よりいくらか安らかさを覚えるだろうと、私のような境遇の者には感じられるが、それとともに、死後の子孫の生活を気にして、死ぬにも死に切れないと云う者もあって、「あとには野となれ、山となれ」のさば

さばした気持は、子孫のない者でなければ味えまい。

「こないだ、山羊が突然死にしました。お父さんが可愛がってよく世話をしていたから、殉死じゃないかと云って居ります」

Hの妻は云った。

「それよりもこういう事がありました。こないだ、岡山のカトリックの学校から、お年寄りの方が来て下さって、洗礼を授けて下さって、これで天国へ行けますと仰有おっしやいしました」

それを聞いて私は、童話見たいな面白さを感じた。押

付け洗礼にしても、死の悩みの和らげられそうに感ぜられた。どうせ直ぐ側のお寺で、先祖代々の習慣通り、仏式で葬儀が営まれるにちがいないが、Aが臨終の際にキリストの恵みにあずかることを思うと、A自身よりも私に取って、死生の悲哀感がいくらか和らげられるような気がするのであった。私が東京留学の途に就く前、小学校卒業後の数年間を、近所の漢学中心の校舎や、岡山の宣教師の私塾に通ったり、自宅で雑書を読み耽ったりして、飄々然として暮していた間に、キリスト教にかぶれて、おりおり隣村のキリスト教講義所を訪れて、そこの

伝道師の教えを受けるともあつたが、Aもたまには私に随いて、二里あまり距つたその講義所へ通つていた。

無論、針の先ほどの信仰もなかつた。Aの一生の仕事は、万葉だの源氏だのの国学書の研究であつたし、山田孝雄氏に師事していたらしいから、おのずから神道に心を寄せていた筈であつた。

「お大師様のお伴をして極楽へお出んされ」と、私の父の死体を棺桶に収める時に、近所の婆さんが云つていたが、Aの死が見送られる時は、何と云われるであらうか。

私が若しも、Aの葬式の場に立つたとしたら、送別の

辞として何と云うべきか。死んだら最後、彼と我とは無縁の人である。死者は死者、生者は生者。親にしろ、兄弟にしろ、絶対無縁であるとする、言うべき事はないではないか。A自身がすでに自分の危篤状態を兄弟にも知らせるなど、側の者に云っていたらしい。しかし、死ぬ間際の人間の気持はどうだか。私はまだ経験しないから分らない。古来の聖人賢者愚者痴人が傍観的に観察して、何とかかとか、知ったか振りに云われて来たが、これこそ究極の真相は分ってはいない。私は断末魔の際に、伝統的に因習的に、南無阿弥陀仏を唱えるだろうか。イ

エス・キリストに救いを求むるだろうか。

「輸血すれば何日か持つだろう」とか、「長くつても今月一杯は六ヶ敷かろう」とか、何も分らない事が分らないなりに取り沙汰された。

「明日は天氣がよさそうだから魚釣に行こうかな」と、Iは突然思いついたように云った。彼は会社の勤めが忙しいので、一晩泊りで帰るつもりで、今朝大阪に着いた時、翌日の夜行車の寝台券を予^{あらか}じめ手に入れようとしたが、どの列車にも一枚もなかった。止むを得ず、その次の晩のを買って来ていた。それでもう一日此処に

留^はつていなければならなかつた。こここの入江では、今は沙魚^{はぜ}釣りの季節で、明日の祭日には、海は釣り舟で賑わう事になっている。Iは舟の借り入れを家の者に頼んで、私にも同行を勧めた。私は漁村に生れながら、釣魚^{つり}の遊びを殆んどやったことがなかつた。幼少の時分、私が東京を夢みながら、本ばかり読んでいた時に、父が、「釣りにでも行つたらどうだ」と云つたことがあつたが、私は、魚を捕つて何が面白いんだと疑つていた。それに、私は、舟に乗ると、波が静かであつても直ぐに酔うのであつた。

「年齢としのせいで今は酔わなくなっているから、釣魚は兎に角舟に乗って見てもいい」と、Iとの同行を約した。

翌日の休日はよく晴れて風もなかった。二人の外にRという、兄弟中での唯一の独身で不運で、終戦後はこの郷里の家に寄寓して乏しくくらししている老人を連れて海へ出た。子を見る親に如しかずか。父はかつて、私がRに似ていると云ったことがあった。私はそうかも知れないと思った。運次第でRは私のようになり、私がRのようになっただかも知れない。釣舟の船頭は、「私の女房はお宅に奉公して居りました。あなたが一番面白い方だとよ

く話していました」と、Iに向って云った。Iが一番面白い方で、私とRとが面白くない方になるらしい。釣りには太公望の昔から釣竿を用いるのが絵になるのだが、今では、日本特産の手ぐすもいらないうで、ナイロンの釣糸を垂れるだけである。糸を抛り出して置けばひとり手に魚は引っかかる筈なのに、これにも巧拙があるのか、私の垂れた糸には容易にかからないようである。Rは案外よく釣った。手の先か頭の中の働きがいいのである。私が、彼はそういう能力を活用して世に処する術を見つかなかつたために乏しい一生を過したのか。

舟に横たわって、秋晴れの空を見ている方が、獲れもしないのに魚釣りの真似をしているよりも、私にふさわしかった。うつらうつら眠り心地になった。夢かうつつか分らない気持で一ときを過して、目を醒ますと、船頭は飯仕度に取り掛っていた。捕り立ての勢いよくピンピン跳ねているハゼやカレイ、或はタコなどを鍋の中に押込んで、砂糖などつかわずに煮るのであつたが、生物の本当の味わいが味わわれるので、都会の料理屋なんかで食べさせられる物とは比べものにならないようであつた。しかし、自然のままの味いは、料理の技巧で作り上げた味

わいと比べものにならないと一概に断ずる訳には行かないので、すべての自然は人工によって異彩を放つのであるまいか。そんな理窟は兎に角、捕り立ての魚を舟で食べるうまささを、私は今度はじめて経験したようなものである。

翌日、私は、今生の別れに、も一度Aに会おうとした。病室を覗くと、Aは前日同様の態度を採っていた。訪問者を努力して見ようとしなかった。意識は明瞭であるらしかったが、どういう事を考えているかは推察もされなかった。

私はまだ泊っていてもよかったが、Aの死期は全然不明であるし、私がいたって、病人の手頼たよりになるのではないし、家族に手数を掛けるだけなのだから、Iと一しよに帰ることにした。「遠路の所を、またお出で下さらなくってもよろしい」と、Hは、近いうちに行われる父の葬式を予定して云った。私達も無論そのつもりであった。

私はAの葬式には列しないにしても、自分が祖先から相続しているこのボロ家の処分のため、今後またやって来なければなるまい。

私は、戦争前に帰郷して、父の最後を見守り、葬式に

も列した。墓地のあたり、桜花爛漫たる頃であった。戦争中、母の死去の知らせに帰郷を急いで、ようやく葬儀に加わったが、その時はみずみずしい新緑に墓地が色取られていた。私は、父の死を見送る光景を「今年の春」と題して書いた。母の死の有様は、「今年の夏」として書いた。A若し死せば、「今年の秋」として、その光景を書くべきだが、若し私の死ぬ時が来たら、誰かが「今年の冬」としてその光景を書くだろうか、と予想しながら、故郷の家を出た。そして、数日間京阪地方で遊んだ。帰宅後、Aの死の知らせを毎日心待ちにしていたが、或

日、或会へ行っている時、岡山の新聞の東京の支局からの電話によって、弟の死を知らされたので、人生に一段落がついた気持がした。

葬儀に列した知人からの知らせを、Iは持って来て私に見せたが、それによると、先祖伝来の仏式でAの葬式が行われた翌日、岡山のカトリックの女学校の講堂で、正式に追悼ミサ葬儀ミサが行われたのだそうだ。ヨゼフという永遠の尊い名前までつけられている。その名前の上には十字架が掛けられている。それよりも私が心を惹ひかれたのは、Aがああ**の**病苦のうちに、洗礼の和歌をつく

っている事である。

洗礼の水まろらかにかほにおつ

かしらにそゝぐたふときろかも

押付け洗礼にしても、彼は何かしら有難い思いをしたにちがいない。そうすると、私よりもAの方が仕合わせか。

(昭和三十四年一月)

日本文学電子図書館

今年の秋

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文学大系16 正宗白鳥集
筑摩書房

昭和44年7月15日 初版第一刷発行



日本文学電子図書館